



1 鋳物の型に溶けた鉄を流し込む作業 2 砂を固めた鋳型をセットする作業 3 同社のロゴが入った管継手 4 これからも可鍛鋳鉄にこだわりたいと語る菊井社長 5 多種多様な企業から依頼される鋳物製品 6 工場内の全景

かわちながの ものづくり探訪

Made in Kawachinagano

作

27

創

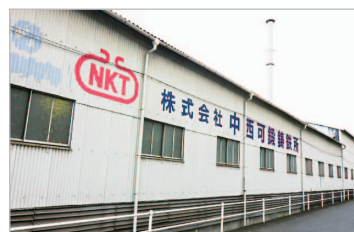
鋳物生産一筋に 100年の歴史誇る 株式会社中西可鍛鋳鉄所

■**鋳物産業が盛んな本市へ**
菊水町にある株式会社中西可鍛鋳鉄所は、大正7年2月に中西実蔵氏が大阪市で創業。本市に移転したのは大正9年で、鋳物に特化した生産を続けています。「河内長野は昔から鋳物産業が盛んだったので、この地に移転したのでしょう」と同社の菊井正和代表取締役社長は話します。鋳物生産には型を作るための砂が必要で、かつて良質な砂がとれた本市周辺で鋳物生産が盛んになったといえます。

■**阪神大震災が転機に**
創業以来、鋳物製の管継手を生産してきた同社に転機が訪れたのは平成7年の阪神淡路大震災の時のこと。地震で水道管やガス管が軒並み被害を受け、破損しやすい鉄管が敬遠される傾向に。さらに高層住宅が都心部で増え、軽量の樹脂製の配管が採用される流れも加速。鉄管の需要が減少するに従い鋳物の管継手の需要も減り続けます。そのような逆境の中、同社では、生き残りをかけて自動車部品や医療機器、産業用ロボットの歯車など管継手以外の鋳物の生産に力点を移します。蓄積された鋳造技術を活かして、「小ロット」「短納期」「低コスト」で製品を供給することにより、販路を拡大。最近では他社ブランド名で生産する鋳物製品も積極的に受注し、様々な会社名が入った製品が同社工場内で見られます。

■**今後も可鍛鋳鉄の社名を残したい**
今ではあまり使われなくなったキュー

ポラという溶鉱炉を現在も維持している同社は、希少となりつつある昔ながらの鋳物の生産が可能であるため、他の鋳造会社が廃業して受注場所を失った仕事が舞い込むことも。「長年培った技術で良質な鋳物製品を届けたい。そして、これからも信頼を維持すること、我々ができないというところまで生き残り、創業以来、社名の中にある『可鍛鋳鉄』をずっと残していきたい」と菊井社長は力強く語りました。



株式会社中西可鍛鋳鉄所
従業員 55名で多品種・小ロットの受注にスピード対応している同社は、今年の2月に創業100周年を迎える。
菊水町6-5 ☎ 53-2481
<http://www.k-nkt.co.jp>



鋳物は
この部分

▲ハンマー(写真右)や、溝掃除のショベル(同左)の柄を支える部分を製造。